# 日本史Ａ、日本史Ｂ

## 第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

### 日　本　史　Ａ

#### １　前　　文

今年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は、現教育課程になって７年目の試験である。「日本史Ａ」の受験者数は3,302人で、昨年度に比べて1,320人（約28.6％）減少した。センター試験全体の受験者数は1,567人（約0.3％）減少したが、地理歴史科全体では21,640人（約5.9％）増加した。受験者数が「地歴Ａ科目」ではいずれも大幅に減少し、「地歴Ｂ科目」ではいずれもやや増加していることからすると、今年度から新たな科目選択の方式が採用されたことなどによる受験動向の変化と思われる。

一方、今年度の「日本史Ａ」本試験の平均点は48.74点で、昨年度より3.27点下降し、標準偏差は18.77と昨年度より1.67ポイント上昇した。この要因としては、受験者が比較的苦手としている「年代順に配列する問題（６択）」の出題が、４題（12点）から５題（15点）に増加したことや、文化史や戦後史などに極端に正答率の低い難問が増えたことなどが考えられる。「日本史Ａ」本試験の平均点と「日本史Ｂ」本試験の平均点（67.92点）との較差も19.18点と、昨年度（12.10点）に比べて拡大した。概して今年度は「日本史Ａ」の設置の趣旨を生かす良問が多かったと評価できるが、今後は「日本史Ｂ」との平均点較差の更なる縮小や平均点60点を目安とするセンター試験の本旨・目標に沿った出題が望まれるところである。そのためにも高等学校における授業時数や実態に合わせた適切な出題内容、難易度については更なる検討を行い、特に「日本史Ｂ」との共通問題については平均点に与える影響が大きいので、問題作成上において特に御配慮をお願いしたい。

以下、今年度の問題について⑴～⑷の視点で分析を行った。

⑴　高等学校学習指導要領（標準２単位）に準拠し、教科書の内容や授業実態に即したレベル・範囲・内容の問題であったか。

⑵　「日本史Ａ」設置の趣旨を生かした「世界史的視野に立った理解」や「歴史的思考力」を評価する問題であったか。

⑶　分野別バランスが取れていたか。

⑷　出題方法や表現などが適切であったか。また、60分の試験問題としてふさわしかったか。

#### ２　試験問題の形式・分量・範囲

⑴　出題形式では（表１）、「正しい文章を選択」の設問が４題（11点）から10題（30点）に増加した一方、「誤った文章を選択」が８題（24点）から３題（９点）に減少した。「古いものから（年代）順に配列」させる設問は昨年度と同じ４題（12点）出題された。それ以外は昨年度とほぼ同様で、全体的に見てバランスの良い出題であった。

⑵　全体の分量は、大問６題、問題数34題で、昨年度と同様である。また、第３問と第５問の計

12題（35点）が「日本史Ｂ」との共通問題であった。正答を導くのに複雑で時間のかかるような問題もなく、例年並の適切な分量であった。

**追・再試験の設問形式**（表１）　　（　）内は配点

| 設　問　形　式 | 平成24年度 | 平成23年度 | 平成22年度 |
|---|---|---|---|
| 正しい事項(人名・単語など)を選択 | 0題（　0点） | 1題（　3点） | 0題（　0点） |
| 誤った事項(人名・単語など)を選択 | 0題（　0点） | 0題（　0点） | 0題（　0点） |
| 二つ以上の事項(人名・単語など)の組合せ | 7題（19点） | 6題（18点） | 7題（20点） |
| 正しい文章を選択 | 10題（30点） | 4題（11点） | 6題（18点） |
| 誤った文章を選択 | 3題（　9点） | 8題（24点） | 6題（18点） |
| 二つ以上の文章の正誤の組合せ | 10題（30点） | 11題（32点） | 9題（27点） |
| 古いものから(年代)順に配列 | 4題（12点） | 4題（12点） | 6題（17点） |
| | 34題（100点） | 34題（100点） | 34題（100点） |

⑶　難易度については（表２）、昨年度の難易度指数と同じ3.26となり、難易度は昨年度と同程度であったと分析できる。設問ごとの難易度を昨年度と比較してみると、今年度も「標準的な問題」を中心とした出題であったが、「やや難しい問題」が１題増加し、「やや易しい問題」が１題増加した。全体的には難易度別の問題数はほぼ昨年度と同程度であった。

**追・再試験の難易度**（表２）

| | 問　題　番　号 | 問題数 | 前年比 |
|---|---|---|---|
| 難しい問題 | | 0 | ±0 |
| やや難しい問題 | 2、8、9、12、14、22、24、26、29、31、32、33、34 | 13 | ＋1 |
| 標準的な問題 | 4、7、10、11、13、15、16、17、18、19、20、21、23、25、27、28、30 | 17 | －2 |
| やや易しい問題 | 1、3、5、6 | 4 | ＋1 |
| 易しい問題 | | 0 | ±0 |
| 難易度指数（難しい順に５～１の指数を与え、平均値を算出） | | 3.26 | ±0 |

（委員の合議により、教科書で扱われているかという観点のほか、現場における授業の実態、受験者の実態を考慮し、問題ごとの難易度を５段階に分類した。以上の分析結果の集計が上の表である。）

⑷　出題範囲を分野別に見ると（表３）、「政治」・「外交」の設問が合わせて19題（57点）であり、ほぼ例年並みのバランスの良い出題であった。昨年度は本試験と追・再試験で「政治」・「外交」の出題数と配点が大きく異なっており、分野別の出題数や配点について、本試験と追・再試験であまり差が出ないような配慮をお願いしたが、今年度はその要望どおりのバランスの取れた出題であったことは高く評価したい。今年度は「史料・グラフ・地図・図版等」を用いた出題が７題（20点）あったが、昨年度より２題増加し、地図を用いた問題も２年ぶりに復活し１題出題された。地理的な空間認識は歴史的な知識や歴史的思考力を問う上で大変重要であるため、次年度以降も是非地図を用いた出題をお願いしたい。時代別に見ると、高等学校学習指導要領に準拠し各時代区分から偏りなく出題されており、全体としてバランスがよく取れている。

**追・再試験の時代別・分野別出題傾向**（表３）　　②は２点問題、他は３点問題である。

| 区分 | | 政治 | 外交 | 社会経済 | 文化 | 史料・グラフ地図・図版等 | 問題数（配点） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 歴史と生活 | 衣食住の変化 | | | | | | ０題（０点） |
| | 交通・通信の変化 | | | | | | ０題（０点） |
| | 現代に残る風習と民間信仰 | | | | | | ０題（０点） |
| | 産業技術の発達と生活 | | | 1 ② | 2 | 3 | ３題（８点） |
| | 地域社会の変化 | | | | | | ０題（０点） |
| 近代日本の形成と19世紀の世界 | 国際環境の変化と幕藩体制の動揺 | | 4 | 11 | | | ２題（６点） |
| | 明治維新と近代国家の形成 | 7 10 17 14 13 6 | 5 8 | | | 9 12 | 10題（30点） |
| | 国際関係の推移と近代産業の成立 | 18 | 16 | | 15 | | ３題（９点） |
| 近代日本の歩みと国際関係 | 政党政治の展開と大衆文化の形成 | | | | | 19 ② 22 | ２題（５点） |
| | 近代産業の発展と国民生活 | | | | | | ０題（０点） |
| | 両大戦をめぐる国際情勢と日本 | 20 29 21 30 | 23 | 27 | 32 | 28 24 | ９題（27点） |
| 第二次世界大戦後の日本と世界 | 戦後政治の動向と国際社会 | 33 25 | | | | | ２題（６点） |
| | 経済の発展と国民生活 | | 26 | 31 34 | | | ３題（９点） |
| | 現代の日本と世界 | | | | | | ０題（０点） |
| 問題数（配点） | | 13題（39点） | ６題（18点） | ５題（14点） | ３題（９点） | ７題（20点） | 34題（100点） |
| 23年度 | | 12題（36点） | ６題（18点） | ７題（21点） | ４題（10点） | ５題（15点） | 34題（100点） |
| 22年度 | | 15題（45点） | ５題（15点） | ７題（19点） | １題（３点） | ６題（18点） | 34題（100点） |

## ３　試験問題の内容・表現・程度

第１問　「日本史Ａ」の主題学習である「産業技術の発達と生活」をテーマとした問題

兄妹の会話形式のリード文を読み、高度経済成長期から現在までの産業技術の発達と生活について考察させる設問である。時代を象徴する東京タワーと東京スカイツリーを題材に歴史への関心を高める内容となっており、史料と図版が効果的に用いられ、主題学習の狙いをうまく反映させた内容である。問１は文脈から解答しやすく、受験者の緊張をやわらげる意味でも良問であった。また２点配点の問題であるという点でも適切な難易度である。問２は「テレビ放送」をテーマに、テレビ出現期の社会について問う内容で、良問であるが、③と④の選択で悩んだ受験者が多かったと思われる。問３は史料と図版を効果的に用いて高度経済成長期の政策と社会問題を組み合わせた問題である。史料中の「国民総生産を倍増」の語句や、図版及びその下の「四日市」の語句が解答への糸口となる。誤文のｂとｄが史料や図版に対してやや不自然な感じを受ける。

第２問　幕末から明治前期にかけての外交関係と政治をテーマとした問題

Ａは幕末期における諸外国との関係に関するリード文を読み解く問題である。問１は標準的な問題であるが、幕藩体制動揺期以降を出題範囲としている「日本史Ａ」において、寛政期の「林子平」が出題された。これは、学問における近代の萌芽、および日本人の欧米諸国への関心の高まりを示す事例として適切な範囲である。問２は日米和親条約の内容の基本事項を問う問題であり、Ｙのプチャーチンの誤文は比較的容易に判別できたと思われる。問３は幕末期の雄藩の動向に関する問題。これも誤文が分かりやすく受験者にとって識別しやすかったと思われる。

Ｂは明治初期における政治・外交・文化に関するリード文を読み解く問題。問４は明治新政府の政策について問う標準的な問題。正文が全て分かりやすいので、「地方三新法」を知らずとも消去法でも解答できる問題であった。問５は明治前期の外交の年代順配列問題である。年代の幅が狭く、関連性も乏しいためにやや難しく思えるが、多くの国との外交を取り扱うなど、世界史的視野に立った出題は「日本史Ａ」の目標に合致しており評価できる。問６は図版をもとに開智学校の建築様式と用途を問う問題である。リード文中の「西洋の技術」や設問文中の「長野県」などヒントが多く、冷静に考えれば正答に到達できる良問である。

第３問　松方正義の生涯をテーマに幕末から明治初期の政治・社会を問う、「日本史Ｂ」の第５問との共通問題

問１はリード文から正答が推測できる基本的な問題である。問２は幕末から明治前期における地方の情勢を問う問題である。各選択肢とも情報量が多い反面、誤文も分かりやすいため解答しやすい問題である。また、下線部との関連性が薄いので配慮していただきたい。問３は「明治期の紙幣現在高」の表をもとに当時の金融政策を問う問題。正答に至るためには、①と②の細かな年代の暗記を前提としており、改善の余地がある。問４は伊藤博文、黒田清隆、山県有朋、西園寺公望４名の首相経験者の業績からの出題。政党を敵視する山県と政党に比較的理解を示した西園寺を入れ替えて誤文を作っており、問題の難易度が高くならないような配慮が感じられる。

第４問　第１次伊藤内閣を中心とした明治期の政治・社会・外交をテーマにした問題

問１は大日本帝国憲法下における内閣制度の問題で、「日本史Ａ」としてはやや難しい問題である。問２は明治中期の教育政策からの出題で、標準的な問題である。問３は明治期の条約改正交渉についての年代順配列問題であった。６択ではあるが標準的な問題であるので、受験者には学習の成果が大きく試されたであろう。問４は自由民権運動からの出題であり、標準的な問題である。しかし、正答である④の「外交の挽回（ばんかい）」は、正しくは「外交失策の挽回」と表現すべきではないか。問５は伊藤博文の政治活動からの出題であり、標準的な問題である。④を正しいと思うかもしれないが、「伊藤の暗殺」のあとに報復的に大韓帝国を併合し、朝鮮総督府を設置したという歴史の文脈を理解していれば正答できる良問である。

第５問　大正・昭和期の日本外交をテーマにした、「日本史Ｂ」の第６問との共通問題

Ａは第一次世界大戦から日中戦争までの外交に関するリード文を読み解く問題。問１は史料「二十一か条要求」を題材に、日本の対外権益の拡大について考察させる問題である。イは史料中の「両鉄道各期限」の文言から推測すれば正答できる。問２は原・田中・浜口・犬養各内閣にまつわる問題であり、幅広い分野からの内容で良問である。問３は日中戦争期の政治社会に関する標準的な問題であるが、Ｘ・Ｙともに正文であるために正答率は低かったと思われる。問４は大正から昭和初期の文化で、図版を用いた出題であるが、ａとｂの選択に苦慮した受験者が多かったのではないか。「普選特輯」をヒントに『改造』が「娯楽」雑誌ではないと推測する力が求められる。

Ｂはアジア・太平洋戦争に突入する過程と戦後の独立回復の経緯に関するリード文を読み解く問題である。問５は太平洋戦争前後の外交からの出題であり、標準的な内容である。問６は説明文をもとに、該当の場所を地図上から選択する組合せ問題であり、やや難しい。「南部仏印」などの用語を知っていても解答できない、地図が生かされた良問である。問７は連合国による占領政策からの出題だが、ｂの「男女別学」とｃの「貴族院」は誤りに気付きやすい文であるため解答しやすかったと思われる。問８は1960年代～70年代の外交・社会分野からの年代順配列問題である。ⅠとⅡの事項が1970年代前半と間隔が狭く、相互の関連性が薄いためにやや難しい。

第６問　1920年代から1960年代までの経済・社会をテーマにした問題

Ａは1920年代から30年代にかけての経済恐慌と国家改造事件に関するリード文を読み解く問題。問１は金融恐慌に関するＸ・Ｙの正誤の組合せ問題であるが、内容も標準的であり良問である。問２は表を基に金融恐慌及び昭和恐慌時代の政治・社会・外交全般を問う問題である。選択肢のａとｂは表から簡単に読み取ることができる反面、ｃとｄで細かな年代を要求しているように見える。しかし、下線部から金融恐慌発生が1927年以降であること、さらに、表からｃに該当するのが1926年のみであることが判明するので、ｃが誤文であると断定できる。図表とリード文が見事に生かされた良問である。問３は1920年代から1930年代にかけての経済政策に関する年代順配列問題である。ⅠとⅢは年代の幅が狭いが、因果関係を理解しておけば難しくない。さらに、Ⅱも基礎力があれば1930年代後半の統制経済の内容だと理解できる問題である。問４は1930年代の国家改造テロ事件であるが、各事件の内容まで踏み込んで学習しておけば、正答を導き出せる標準的な問題である。

Ｂは日中戦争以降の財閥系企業の成長と敗戦による解体、及び戦後の企業集団の形成による再生に関してのリード文を読み解く問題。問５は戦後の日本企業の成長についての問題であるが、そもそも「企業集団」を歴史用語として日本史の試験で問いかける重要性があるのか疑問である。問６は日中戦争期の文学からの出題である。受験者が苦手とする分野だが、正文であるｂとｄ双方に含まれていた「兵隊」の文字が、解決の糸口になったかもしれない。問７はGHQの指令による国内政策からの出題である。④の破壊活動防止法がGHQ占領期に近いために受験者は混乱したと思われる。問８は戦後の労働組合運動からの出題であるが、正文の③には頻度の高い歴史用語が含まれていないために受験者にとって選びにくい問題であったと思われる。

## ４　要　　約

前文で述べた⑴～⑷の視点についての意見・要望を記すことにする。

⑴　今年度の「日本史Ａ」の追・再試験は、本試験と比較しても標準２単位科目としては極端に難しかった問題はなかったが、やや難しい問題が多く含まれている。したがって本試験の平均点が48.74点であったことを考慮すると、追・再試験も50点を割り込んだと予想できる。出題範囲は寛政の改革期の林子平から1970年代の東京スカイツリーまでと広範囲であった。林子平の出題に違和感を持った受験者もいたかもしれないが、「３　試験問題の内容・表現・程度」の項でも触れたように、学問における近代の萌芽、及び日本人の欧米諸国への関心の高まりを示す事例としては適切な範囲である。また、多面的・多角的に考察し判断する能力を図る意味で、図版や史料を活用した問題が増えたことは評価できる。さらに、第６問の問２のようにリード文を精読することで正答を導き出せる良問も見られた。

⑵「世界史的視野に立った理解」という観点では、外交分野からの出題が昨年と同様６題であった。そのうち３題が年代順配列問題、２題が二つの事項の組合せ問題となっており難易度のバランスが取られた構成となっている。「歴史的思考力」の観点からは「史料・グラフ・地図・図版等」を用いた設問が７題であり、昨年よりも２題増えたことは評価できる。特に第５問の問６のような地図を用いた設問は、高等学校側の要望がしっかり反映されたものと評価できる。今後も是非出題していただきたい。文学史については第６問の問６のように暗記を前提とするような設問も見受けられたが、第２問の問６や第５問の問４のように図版から推測すれば正答に至る良問もあった。

⑶　分野別では政治・外交・社会経済・文化の全ての分野でバランス良く出題されていた。分野横断の幅広い思考・判断を求める設問が多かった点も評価できる。前文でも述べたように時代別の出題もバランスが取れていたが、項目別に見た場合「近代産業の発展と国民生活」からの出題が無かった。

⑷　出題方法や表現については、年代順配列問題については年代の幅の狭さや関連性の希薄さのため難易度が上がった問題も見受けられ、改善をお願いしたい。基本的事項の年代の知識は必要であるが、今回の問題では、より細かな年代の知識を前提としたものが出題されていた。これは教育現場での知識偏重を助長する恐れがあり再考を強く希望する。表現については、第６問の問６では、ａとｃがもともと日中戦争期の作品でないことを考慮すると、設問文も「次のａ～ｄのう

ち、日中戦争期の文学について述べた文として正しいものの組合せを、下の①～④のうちから一つ選べ。」と問うべきである。出題数は昨年度と同様34題で、60分の試験問題として適切であった。

# 日　本　史　B

## 1　前　　文

基礎・基本的な歴史的事項の知識を基にして、受験者の理解力・歴史的思考力を問うとともに、事象の背景や本質を、国際環境と関連付けて考察させようという姿勢が見られた。高等学校段階での学習到達の程度を適切に測るための工夫がなされていたと評価できる。しかし、内容や設問形式、難易度等について配慮をお願いしたい箇所も見られた。その要点を次の３点にまとめた。

①　縄文時代から現代までバランス良く出題されており、要求されていた知識も、ほぼ高等学校の授業で学習する基礎・基本的な事項であった。各時代の特徴及び歴史的事象の推移・変化、あるいは出来事の背景に対する理解を問う適切な内容であり、今後とも継続していただきたい。

②　設問形式では、事項（人名・単語）を選択する形式がなくなり、二つ以上の文章の組合せから判断させる形式の問題について、数のバランスが良くなっている。また、一見難しそうに見えても、リード文や設問文の中に、正答を導くための配慮がなされていた。しかし、一部、評価する学習内容としては細かすぎるものも見られ、検討をお願いしたい。

③　資料の取扱いでは、写真・絵画資料が、教科書にほぼ掲載されている、受験者にとってなじみ深いものであり、見慣れないものでも正答を導くための工夫がなされていた。しかし、地図における選択肢の場所や、史料中の空欄を補充させる形式の設問において、改善を求めたいものも見られた。

このように、高等学校「日本史Ｂ」の学習成果を評価する問題として、①の基礎・基本的な事項をもとに、時代の特徴及び歴史的事象の推移・変化や背景を問う姿勢や、②の設問形式と学習内容の程度のバランスや配慮、③の資料の取扱いにおいて受験者にとってなじみ深いものを活用することなど、高く評価できる点については、今後も作問の在り方に継続して反映していただくことを強く希望したい。

今年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）追・再試験の問題の検討評価に当たっては、本試験に準じて行った。

（注）文中で具体的に取り上げる際は、解答番号で表記した。

例　15 ＝解答番号15の設問

## 2　内　容・範　囲

今年度の試験は、理解力や歴史的思考力を問う姿勢を継承するとともに、事象の背景や本質を問い、国際環境との関連を視野に入れて考察させる、高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）の目標に即しての出題であった。また、出題者からの強いメッセージを感じさせるものも見られた。しかしながら、内容の取扱いや出題形式、難易度について検討していただきたい点もある（「　」内は学習指導要領からの引用語句である）。

### (1)　出 題 傾 向

出題傾向について、時代別及び分野別の視点からそれぞれ概観すると次のようなことが言える。

**時代別・分野別出題傾向**（表１）　　表中の白抜き数字は各２点、それ以外は各３点

| 区分 | | 政治 | 外交 | 社会<br>経済<br>交通 | 文化<br>思想<br>宗教 | 資史料<br>図絵<br>地図 | 出題数・配点<br>（　）内は23年度<br>［　］内は22年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 原始・古代 | 先土器時代 | | | | | | 10題　28点<br>（８題　22点）<br>［５題　14点］ |
| | 縄文時代 | | | | | 7 | |
| | 弥生時代 | | | 1 | | | |
| | 古墳時代 | | | | 9 | 8 | |
| | 飛鳥～白鳳時代 | | | | | | |
| | 奈良時代 | 2 | | | 12 10 | 11 | |
| | 平安時代 前期 | 13 | | | | | |
| | 平安時代 中期 | | | 16 | | | |
| 中世 | 院政時代 | 17 | | 14 | | 15 | 5題　14点<br>（８題　22点）<br>［５題　22点］ |
| | 鎌倉時代 前期 | | | | | | |
| | 鎌倉時代 後期 | | | | | 3 | |
| | 南北朝時代 | | | | | | |
| | 室町時代 前期 | | | | | | |
| | 室町時代 後期 | | | 18 | | | |
| 近世 | 織豊政権時代 | | | | | | 7題　20点<br>（７題　19点）<br>［10題　27点］ |
| | 江戸時代 前期 | 20 22 | | 19 | | | |
| | 江戸時代 後期 | 24 | 23 | | 26 | 21 | |
| 近代 | 明治時代 前期 | | | | | 27 | 11題　30点<br>（９題　25点）<br>［11題　31点］ |
| | 明治時代 後期 | 25 28 | | | | | |
| | 大正時代 | | 5 | | | 29 32 | |
| | 昭和時代 前期 | 30 | | | | | |
| | 昭和時代 大戦期 | 31 | 33 | | | 4 34 | |
| 現代 | 戦後～占領期 | 35 | | | | | ３題　８点<br>（４題　12点）<br>［２題　６点］ |
| | 高度経済成長期 | | 6 36 | | | | |
| | ～現代 | | | | | | |
| 24年度出題数・配点 | | 11題32点 | ５題13点 | ５題13点 | ４題12点 | 11題30点 | 36題 100点 |
| 23年度出題数・配点 | | ８題23点 | １題 ３点 | 12題35点 | 10題24点 | ５題15点 | （36題 100点） |
| 22年度出題数・配点 | | 10題28点 | ４題 ９点 | 13題36点 | ２題 ６点 | ７題21点 | ［36題 100点］ |

時代別では、中世がやや薄い感はあるものの、縄文時代から現代までバランス良く出題されている。

分野別では、史料・写真・地図・表・系図から受験者に考察させる出題が大幅に増加しており、学習指導要領に記されている「様々な歴史的資料の特性に着目して、資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解させる」という狙いに沿っている。また、昨年度、政治史・外交史がかなり減少したことに対し改善を求めたが、今年度は増加し、こちらも昨年度に比べてバランスが良くなっている。

そして表１に見られるように、縦方向、横方向ともに矢印が多く、全体として、各時代の特色と時代を超えた大きな流れの両方を捉えさせる出題となったことに敬意を表したい。

⑵ 「歴史の考察」を意識した出題

第１問は、高校生２人が「戦争の歴史」をテーマとした自由研究を行ったとして、会話をリード文とした出題となっている。「⑴歴史の考察」の「イ歴史の追究」には「時代ごとに区切らない主題を設定し追求する」と記されており、その狙いに沿った出題である。[1]は弥生時代の、[2]は奈良時代から江戸時代までの社会の特徴を、軍事という視点から考察させている。リード文Ｂ及びそれを受けての[5]では、戦争と植民地支配は、全ての人を不幸にするという強い主張が感じられる。学習指導要領に記されている「日本史Ｂ」という科目の最終的な狙いは、「民主的で平和的な国家・社会を形成する日本人としての自覚及び国際社会に主体的に対応していくことのできる資質を養う」ことであり、高等学校側としても、この出題者からのメッセージをしっかりと受け止めたい。

また、[12]は正倉院と宝物に関する伝播と内容を問うており、「文化財保護の重要性について理解」させたいという思いが見られる。[26]では、幕末から明治前期における福井県、山口県、福島県、北海道の様子を判断させており、「ウ地域社会の歴史と文化」にある「その地域の自然条件や政治的、経済的な諸条件と関連付けて考察させる」という狙いに沿っている。ただし、正誤の判断が、謝花昇は北海道ではなく沖縄であるという点にほぼ委ねられたのは、評価する学習内容としてはやや細かすぎると考える。

その一方で、空欄を補充する形式の[10]、[13]で問われた東大寺、聖武天皇、蔵人頭、藤原道長や、年代配列問題[20]で判断を求められた徳川秀忠、新井白石、松平定信は、いずれも基礎・基本的な事項であった。

これらから総じて、学習指導要領の狙いに沿って、基礎・基本的な事項の定着と、世界の中の日本というグローバルな視点と、地域社会というローカルな視点の両方から歴史を考察する力を測る良問であったと評価できる。

⑶ 理解力・歴史的思考力を重視する姿勢

「日本史Ｂ」の目標の一つである「歴史的思考力を育成する」ために大切なことは、出来事の背景やその本質を理解させることである。そのことを強く感じさせる出題が見られた。

[18]は、惣村の自立というものが、領主（守護）からの自治の獲得であったという本質が理解できていれば、正答を導くことができた。[28]も、西園寺公望が首相を務めた時期が桂園時代であることを考えれば、彼が政党員の政治活動を抑制するはずはないと判断できる。

空欄を補充する形式の[33]は、第２次近衛文麿内閣の外相松岡洋右と、サンフランシスコ講和

会議に招請されなかった国が中華人民共和国であることを選ばせる設問であった。一見、難しいように見えるが、松岡洋右については、続くリード文にドイツやイタリアとの軍事同盟締結を進めたことが記されており、判断を助ける配慮がなされている。そして、講和会議に招請されなかった国については、1949年に中華人民共和国が成立して台湾の中華民国と事実上二つの中国になり、結局どちらも招かれなかったという冷戦下の国際情勢が背景として理解されていれば、正答を判断することができた。

これらは、いずれも歴史的事項の本質や背景を理解していることの重要性を示す問題であった。

(4) 内容の取扱い

問われている知識については、基礎・基本的な事項が多く、事項の本質や背景への理解を求める出題が見られた。また、5、34は、東アジアの中での日本について考えさせるものであり、「各時代における国際環境との関連を視野に入れ、空間的な関わりや世界史的な視点から我が国の歴史と文化を考える学習」を重視する姿勢をうかがわせた。

6は第二次世界大戦後の戦争が、日本に及ぼした影響についての理解を問うており、「現代社会の動向と日本の課題及び役割について考察させる」ものである。同じ姿勢は、東京オリンピックからサミットまでの1960年代から70年代の出来事を問うた36でも見られ、歴史を単なる過去の出来事とせずに、現代につながるものとして見てほしいという出題者の意図を感じる。

## ３　分　量・程　度

昨年度の追・再試験、今年度の本試験と同様に大問６問、小問36問であった。分量としては適切であると言える。また各設問で提示される選択肢や組合せ問題の文章等、解答に関わる文章が２行にわたるものが36文であり、一昨年度と同程度になった（昨年度は26文）。選択肢の文章が全て２行に及ぶ設問は2・23の２問であり、昨年度の本試験と同じ量である。受験者が読み取るべき情報量としては適量であると言えよう。

試験問題の程度に関して、全般的には基本的な設問が中心であったが、「細かな事象や高度な事項・事柄」に踏み込んだ設問が本試験に比べるとやや多く見受けられた。24は三方領知（領地）替えと関連する藩名を選ばせ、25は島津斉彬と久光の兄弟から正答を選択させるものである。また、29は選択肢の南満州と東部内蒙古がともに二十一か条要求の中に出てくる語句であり、これらは細かな事柄である感が否めない。30では片岡直温、三・一五事件に関する知識が求められた。金融恐慌から金解禁、昭和恐慌へという時代の流れに主眼をおいた高等学校の授業では、三・一五事件を大きく取り扱うことは少なく、受験者には難問であったと思われる。また9の年代配列問題は、暦法と仏教伝来の年代幅が狭く判断が難しい。

その一方で、17は荘園制の成立と展開に関して、基本的事項を押さえつつその過程を正確に理解できているかを問う良問である。14は院政について、35は戦後の占領政策についての基本的な歴史理解を測る設問であった。

## 4　表　現・形　式

(1)　設 問 形 式

設問形式を分類すると表２のようになる。昨年度に比べて関連事項の組合せを選択する形式が増え、設問形式の全体的なバランスは良くなった。事項（人名・単語）を選択することで知識のみを問う設問がなくなったことは、昨年度の提言が受け入れられたものと解釈している。６択形式の年代配列問題は５問であり、本試験と比較しても適量と言える。19は３カ所の空欄補充であり、リード文を用いた一種の史料問題ともなっている。史料も読みやすく、設問形式に工夫がみられる。11は図を使って考えさせる良問である。リード文の中に正答へとつながる配慮がなされており、思考力を問う設問として評価したい。その一方、文章の正誤を選択する設問においては、11問中８問が正文を選択させるものであり、誤文を選ばせる形式のものとのバランスも考慮してほしい。8では弥生・古墳時代の遺跡について問われたが、ａとｃの位置が近く、選択肢に工夫を求めたい。

**設問形式**（表２）　　表中の白抜き数字は各２点、それ以外は各３点

| 設　問　形　式 | | 平成24年度 | | 平成23年度 |
|---|---|---|---|---|
| | | 問題数 | 問　題　番　号 | 問題数 |
| 事項（人名・単語）を選択する形式 | | 0 | | 3 |
| 文章の正誤を選択する形式 | | 11 | 1、5、12、14、18、22、23、26、27、28、30 | 12 |
| 二つ以上文章の組合せ | 空欄を補充する形式 | 6 | 10、13、19、25、29、33 | 6 |
| | 文章の正誤の組合せを選択する形式 | 5 | 4、11、16、21、31 | 5 |
| | 年代配列を選択する形式 | 5 | 3、9、17、20、36 | 4 |
| | 正しい文章の組合せを選択する形式 | 4 | 2、15、32、35 | 4 |
| | 関連事項の組合せを選択する形式 | 6 | 6、7、8、24、29、34 | 2 |
| | | 36 | | 36 |

(2)　表　　現

リード文や選択肢は全体的に読みやすい配慮がなされている。しかし、気になる部分もあった。16のＸでは留守所で正誤の判断をさせているが、歴史理解に関係なく「留守」の言葉の意味だけで正答を導くことができた。22ではリード文の下線が「年貢増徴策が限界に達してきたため、新たな政策を試みた」まで引かれているのに対し、設問は田沼意次の政策を問うものであり、下線部の設定に違和感を覚える。逆に23の選択肢はうまく表現されている。具体的には、①では俵物三品だけでなく「幕府は全国各地に役人を派遣して」といった二重の誤りを盛り込むことにより、受験者の判断を容易にさせていた。

(3)　図表や写真等の扱い

本試験同様、資史料・写真等を扱う設問が11問と大幅に増えた（昨年度５問）。写真資料を用いた出題は本試験２問に比べて追・再試験の方が４問と多かった。文字資料ばかりでなく視覚資料を積極的に導入しようとする問題作成部会の取組は大いに評価できる。32で問われている総

合雑誌「改造」は、一見難しく思えるが、「普選特集」という見出しを読み取らせることを意図した良問である。このように与えられた資料中の情報を活用させる設問は、学習指導要領の狙いに沿っている。系図を用いた 15 は、清和源氏の勢力伸長を人物名と戦乱の内容を理解し考察できているかを測る設問であった。 8 ・ 34 は地図からの出題で、歴史を空間的に把握していく力が必要とされた。 27 は、西南戦争後の財政に関する知識と表の読み取りを組み合わせ、しかも計算力も求められる良問であった。写真資料・史料問題を含めて、「歴史の展開」を「総合的に考察させ」ることによって、多面的な理解力や歴史的思考力を測ろうとする問題作成部会の意思を感じる。 4 は歴史的思考力はもちろん、史料をきちんと読み取り、内容を理解すれば正答を導き出せる良問となっている。

ただし 3 のＩは、受験者になじみの深い長篠合戦図屏風であるが、鉄砲がもう少しはっきりと識別できればと思う。 21 は図が**甲・乙**ともに浮世絵であった。江戸の町人文化を問うならば、浮世絵だけに絞らず、もっと幅を広げても良かったと考える。

## ５　要　　約

⑴　高等学校の授業への影響

本試験と同様に学習指導要領に準拠した作問構成となっており、また、歴史的思考力を問おうとする問題作成部会の姿勢に敬意を表したい。本試験の第１問が学習指導要領の「博物館などの施設や地域の文化財についての関心を高める」ことを意図した出題なら、追・再試験は戦争の歴史をテーマとして「歴史の追究」における「時代ごとに区切らない主題を設定」した出題になっている。本試験の評価でも述べたことだが、新学習指導要領の導入が間近に迫っている現在、その十分な理解の上に構築された授業が高等学校側に求められている。

今年度の追・再試験では、近年本試験では出題が見られなかった原始時代に作問が及んであり、改めて教師に「日本史Ｂ」の授業の開始時期の重要性を認識させたと思われる。どの教科・科目でも、導入時にその目的を生徒に説明する。その際に、地域の文化財である遺跡の意義などを例示するが、縄文期は遺跡の分布に地域的差異が少ないため、「日本史Ｂ」の目的を伝えやすい時代でもある。「国際社会に主体的に生きる」ことが強調されて近現代史が重視される傾向にあるが、同時に「我が国の文化と伝統の特色についての認識」を深めさせるためには、今年度の追・再試験のように各時代のバランスが取れた作問をお願いする次第である。

⑵　意見・提案等

全体を通して今年度の追・再試験は、各時代のバランスに優れ、「歴史の考察」も本試験と同様に盛り込まれ、歴史的思考力を重視した良問が多かった。歴史的事項の本質やその背景への理解を求める設問でありながら、内容は基礎的・基本的な事項が多く、分量・程度も適切であり、昨年度指摘させていただいた設問形式の改善もみられた。また、図版や統計資料においては、与えられた資料を読み込んだり分析する力を要求する作問がなされており、知識だけでは解答できない良問が増えたことは、大いに評価すべきことである。今後もこの傾向を継続していただきたい。

最後に、これからもセンター試験の問題作成部会と高等学校側との対話を通じて、「日本史Ｂ」の問題内容についてより一層の工夫がなされることを期待したい。